古典染織復興会議　帷子模造事業

報告会

於　弘道館（水戸藩校）

特別史跡・国指定重要文化財

令和6年9月21日～24日

江戸時代の夏を彩った麻の衣“帷子（かたびら）”

その蘇った宇宙

＜奈良県立美術館での公開を終えて＞

ご挨拶

この度、八年の歳月をかけて模造制作して参りました「江戸期の帷子」の完成報告並びに作品の展示解説会を開催させて頂く運びとなりました。この「稀有な歩み」を陰で支えてくださった個人と大勢の市民の皆様に改めて心から感謝を申し上げます。

また、かくも由緒ゆかしき「弘道館」で報告会を開くことをお認めくださった茨城県並びに弘道館の並々ならぬご配慮に深く感謝申し上げます。そして、古典研究の為にお訪ねした各美術館・各研究室の皆様に、そして、そもそも私の分を弁えぬ申込み（所蔵品の熟覧、その模造の申請）を正面から受け止めて検討してくださった奈良県立美術館と飯島学芸員のその「尚古の門」を開いて下さったご高配に深く頭（こうべ）を垂れます。また見解の相違を克服しながらよく作品に纏（まと）め上げてくださった各職方の皆様のその都度の工夫や密かなご苦心に衷心より感謝を申し上げます。そして最後に、家計をも顧みぬ独り善がりを陰で支えて来てくれた妻千賀子に交々言い尽くせぬ敬愛と感謝を捧げます。

さて、かくご挨拶申し上げます私は『江戸の染織文化の至宝『夏の衣・帷子(かたびら)』の模造プロジェクト」を推進してまいりました「古典染織復興会議」の代表・中野童男(をぐな)と申します。
話が多少長くなりますが最後までお付き合い下さいますようお願い申し上げます。

この度の弘道館での「報告会」に先駆けて、今年7月13日から8月25日までの期間、
「帷子模造事業の一里塚」となる展覧会が「奈良県立美術館」に於いて開催されました。
美術館はじめこのプロジェクトにご協力くださった全ての皆様に改めて御礼を申し上げます。

では、まずは美術館での様子を写真をお覗きいただきながらお話を進めて参ります。

「江戸時代のきもの・{特別陳列} 日本の伝統文化を知る」と題されたこの展覧会で、
私共が2017年から当美術館の収蔵庫で熟覧研究を重ねて制作して参りました「江戸時代の帷子」
四領と、「平成の帷子」として新たに制作致しました一領が「特集展示」として紹介されました。

開会セレモニーで挨拶される籔内佐斗司館長　（東京芸大大学院教授・彫刻家）

・・・奈良県立美術館のカタログから・・・

特集展示　帷子（かたびら）の模造を試みる

前章でも紹介したように、夏用のきものである帷子は麻の生地で仕立てられます。しかし近代以降はあつらえられることが減っていき、上布を扱って帷子を仕立てられる職人も少なくなっていきました。現代では帷子は希少な存在となっています。

こうした状況の中で帷子を再び生み出すべく、上質な麻布として長い伝統を誇る越後上布（えちごじょうふ）を用いて江戸時代の帷子を模造するプロジェクトが始動しました。このプロジェクトは、中野童男（なかのわらべお）氏が発意して民間の善意を集めて進められました。当館が所蔵する帷子から4領が選ばれて模造が試みられました。絹とは性質の異なる麻生地を扱うことには困難もありましたが、現代の材料や手法も用いつつ、数年の年月をかけて完成に至りました。企画を主導した中野氏、趣旨に賛同した支援者、上布の織元・染織（せんしょく）の職方、それぞれの熱意の結晶です。

№42　白藍染分麻地風景秋草文様帷子
令和元年（2019）　丈 157.0×裄 67.4cm
総合企画：中野童男
麻地：中島清志（重要無形文化財 越後上布技術保存協会）
友禅：成謙、刺繍：村山刺繍店、絞り・悉皆：多ち花
個人蔵（奈良県立美術館寄託）

昔から伝わる図案などを参考に描き置いていた下絵図をもとに制作した帷子です。越後上布の白生地を絞り分け、そこに手描き友禅と刺繍で「風わたる武蔵野」の風景を表したものです。完成までに2年の歳月を要しましたが、この後に続く一連の帷子模造のきっかけとなりました。

薄紅麻地葡萄文箱文様帷子（うすべにあさじぶどうふばこもんようかたびら）の模造制作

№44　薄紅麻地葡萄文箱文様帷子（模造）
令和6年（2024）　丈 151.2×裄 63.6cm
総合企画：中野童男　麻地：中島清志（重要無形文化財 越後上布技術保存協会）
下絵：宮崎克義、悉皆・刺繍：村山刺繍店
古典染織復興会議蔵（奈良県立美術館寄託）

原作品（№43）は、右袖を起点として葡萄の蔓を肩と右裾に這わせ、要所に文箱を散らす意匠の帷子です。文箱の蓋には桜や菊唐草が刺繍され、あたかも蒔絵のようです。また葡萄の房は金糸で駒繍されています。絞り染めは使わず、刺繍主体に加飾されています。文様の配置は寛文小袖に類似しますが、第3章で紹介する№59・60に見られる旺盛な勢いや動きは感じられず、おとなしい印象があります。寛文小袖の流行期から少し時代が下るものと考えられます。原作品の地色は紺色しており、模造にあたってはどの程度に染めるかが難題となりました。

なお本作はプロジェクトの趣旨に賛同した有志の支援により模造が実現しました。

原作品　№43　薄紅麻地葡萄文箱文様帷子
江戸時代・17世紀　丈 145.0×裄 60.4cm
奈良県立美術館蔵

黒麻地几帳（くろあさじきちょう）に桐（きり）文様帷子（もんようかたびら）の模造制作

№46　黒麻地几帳に桐文様帷子（模造）
令和4年（2022）　丈 159.2×裄 61.8cm
総合企画：中野童男　麻地：小河正義（重要無形文化財 越後上布技術保存協会）
染：北本染芸、刺繍：京繍すぎした、悉皆：野口
個人蔵（奈良県立美術館寄託）

原作品（№45）は、右裾に起点を置いて、几帳の合間を縫うように立ち上がる桐の木が華やかに表された帷子です。几帳や御簾は、平安時代の王朝文化を想起させる高貴な文様として、江戸時代に好まれたようです。左腰のわずかな空白や、全体に広がる大柄な文様、さらに几帳の柱や桐の幹・葉に施された大粒の摺匹田は、いわゆる元禄小袖の特徴に通じるもので、本作も元禄（1688～1704）頃の帷子であろうと考えられます。

模造に際しては必要な箇所を糊伏せしたのち、地色と几帳の綿代調の部分を引き染めで染めました。蒸し・洗いの工程を経て摺匹田と刺繍を入れ、仕立てました。

原作品　№45　黒麻地几帳に桐文様帷子
江戸時代・17世紀末～18世紀初　丈 155.0×裄 60.2cm
奈良県立美術館蔵

白麻地光琳松（しろあさじこうりんまつ）文様帷子（もんようかたびら）の模造制作

№48　白麻地光琳松文様帷子（模造）
令和元年（2019）　丈 157.0×裄 58.6cm
総合企画：中野童男　麻地：中島清志（重要無形文化財 越後上布技術保存協会）
染：北本染芸、刺繍：京繍すぎした、悉皆：野口
個人蔵（奈良県立美術館寄託）

原作品（№47）はいわゆる光琳文様の松を配した帷子です。飄々とした特徴ある松の形が、染めと摺匹田、刺繍で表されています。色数も少ない簡潔な表現ですが、松の並びが巧みで、浜辺の松原を見るような感覚を覚えます。左腰に空白があることから古様を残すようにも思われ、江戸時代中期、18世紀半ば頃の帷子かと考えられます。

原作品は一度解体されており、部分的に別布を補って帷子に仕立て直されています。そのため文様に欠落があり、模造に際してはこれらの欠落を補う方針が採られました。松の幹や枝を素描き（手描き）で彩色した後、松葉の部分を摺匹田で染め、蒸しの工程を終えた後、刺繍を加えて仕立てました。

原作品　№47　白麻地光琳松文様帷子
江戸時代・18世紀　丈 147.0×裄 58.0cm
奈良県立美術館蔵

玉子麻地銀杏冊子文様帷子の模造制作

№50　玉子麻地銀杏冊子文様帷子（模造）
令和元年（2019）　丈 156.4×裄 61.6cm
総合企画：中野重男　麻地：桑原功（重要無形文化財 越後上布技術保存協会）
染・刺繍：京繍すずした、悉皆：野口
個人蔵（奈良県立美術館寄託）

原作品（№49）は腰の高さまでに文様を配した帷子で、江戸時代中期のものと考えられます。裾から立ち上がる銀杏と、その間に散らされる冊子が、友禅染と刺繍で表されます。冊子の文様は「松に鶴」「雪中の筍掘り」「七宝に梅花」など、異なる内容が丁寧に施されます。その意匠には松・竹・梅が含まれていて、さりげなく吉祥の意味をも備えています。

中間色を主とした色づかいや緻密な施工が、上品な華やかさを示しています。繊細な糸目糊や丹念な色挿しの仕上がりも見事な、友禅染の逸品と言えましょう。

模造は糊糸目を置いたのち、文様部分に彩色（色挿し）を施し、地染めの工程を経て帷子に仕立てられました。

原作品　№49　玉子麻地銀杏冊子文様帷子
江戸時代・18 世紀　丈 150.5×裄 61.2cm
奈良県立美術館蔵

— 17 —

第３章　江戸時代のきもの―技法の発展と意匠の変遷

衣服の主役になった「小袖」は、表着として最も目立つ位置で着られるようになり、また形という観点でも完成されたものになりました。そうなると、小袖に備わった肩から裾まで連続する大きな画面にどのような文様をあしらい、装飾を施すかに力が注がれるようになりました。

技法の発展もめざましく、様々な技法が小袖を飾りました。桃山時代から続いて使われた絞り染めや刺繍、箔が江戸時代初期の豪華な小袖の制作を支え、その後には鹿の子絞りによる手の込んだ小袖も作られました。とりわけ画期的だったのは友禅染の登場です。絵のような多色かつ繊細な表現を可能にしたこの技法は、たちまち小袖の染色技法の主流となり、技法と相性の良い縮緬が小袖の生地に多用されるという変化をももたらしました。

意匠の面では、時代に応じて文様の配置や表し方が変化していきました。江戸時代に多数発行された雛形本という小袖の図案集から、当時どのような文様が流行していたのかを知ることができます。

この章では江戸時代のきものに見られる技法の発展とデザインの変遷をたどります。

（上）№60　白統地菊水文様小袖
江戸時代・17 世紀　丈 156.0×裄 66.0cm
（中）№73　浅葱絹縮地夏草に文字散らし文様小袖
江戸時代・18 世紀　丈 157.0×裄 61.5cm
（下）№87　萌葱絹地薬玉文様単衣
江戸時代・19 世紀　丈 158.5×裄 61.8cm
いずれも奈良県立美術館蔵

— 18 —

館長、籔内佐斗司氏の開会挨拶で始まった内覧会には館長のお話に笑い合い頷き合いながら大勢の皆さんがお集まり下さいました。本展覧会は現代を生きる私達と民族衣装である「きもの」との関わりを身近な視点から解説しながら、そのひそやかな歴史や婚礼衣装その他人生の節々を彩った秀逸な遺品を展示して、ゆったりと鑑賞して戴きながら、ゆかしい和装文化に「想い」を馳せて戴けるように配慮された温かな雰囲気の漂う会場に仕上がっていました。

また、この展覧会で美術館は私どもの八年間に及ぶ「帷子模造製作の試み」の次第を「特集展示」として一室設けて紹介して下さいました。その風景写真であり、カタログの一部です。
尚、作品は前期三領、後期三領と分けて展示されました。
また、展覧会のカタログにも丁寧な解説を5ページにわたって添えてくださいました。

では、そもそも「帷子」とは・・・

ここからは、今回の事業の一番最後に手掛けた「薄紅麻地葡萄文箱文様繍帷子」についてお話しながら、随時「帷子・かたびら」の魅力をお伝えして参ります。

この「薄紅麻地葡萄文箱文様帷子」は太古から織り継いで来た「苧麻（ちょま）」を原料とした極薄の麻生地を用いて、それをあえかな薄紅色に染め上げたのちに秀逸な刺繍で瀟洒（しょうしゃ）な図柄を丁寧に繍（ぬ）いあげた夏の衣裳です。

江戸開府の慶長年間から６０年余が経った寛文年間、「慶長小袖」のような豪悦(ごうえつ)な嗜好(しこう)がやや和らいで来た頃に作られた帷子で、『寛文模様』と云われる大らかな空間取り、即ち右肩から相対する左裾(すそ)に向かって弧を描くように模様を表し、左身頃を広く余白のまま残すという、当時の流行を品良く纏めあげた秀逸な遺品です。

しかし、この作品はご覧の通り、薄汚れてしまっているが故に展示される機会も少なく埋れがちな遺品です。が、後程ご紹介致します「美の伝導者」によって見出され、彼のコレクションに「その秀逸な存在」が記録されることなった運の良い「寛文期の遺品」なのです。

＜薄紅麻地葡萄文箱文様繍帷子　部分＞

私達も、「薄紅色」と云う褪色し易い地色である故に、また、世にこの色系の遺品が誠に希少である事をも考慮して、この帷子を復刻の対象として選んで、元の華やいだ姿に戻してあげようと縷々心配りをしつつ、この作品から多くを学び、後の世に伝えるべく、摸造を検討して来ました。そして、温かな祈りをこめた主題を卓越した刺繍の技で表現したこの遺品の存在は「後世に伝え置くべき秀逸」であると確信するに至りました。

それにしても残念なことに薄紅色の地色は既に褪色黄変して、総体に薄汚れてしまっていて、刺繍も浮き上がり、往時の華やいだ雰囲気を偲ぶには余りにも切ない有様なのです。

～秀逸な刺繍の技、想いゆかしい意匠～

片身頃を大きく開ける寛文期特有のその意匠感覚からも、また、その気張らないデザインを際立たせる刺繍の技の秀逸さからも、今まで復刻してきた他の三領の「帷子」とは趣をことに

した刺繍技量だけを際立たせた意匠の優れた逸品です。
それ故に「第一期・摸造プロジェクト計画」の最後に位置づけて準備をして参りました。

金駒糸で刺繍された葡萄の房のその裏の糸留めの手際の良さには驚嘆させられます。

～その意匠（デザイン）の意味するところ～

相思相愛、寄り添う二筋の葡萄の蔓を流麗に肩から裾へと流して、それに床しい便りを収める平安螺鈿文箱（らでんふばこ）を幾つかあしらって、深い想いを象徴的に忍ばせた意匠。即ち葡萄文様で命の永生・家運長久、子孫繁栄を、文箱紋様で文を交わし合う恋の成就を謳った婚礼衣装ではなかろうかと

絵師の意図を読み解いて居ります。この衣装を花嫁御寮の肩に掛けてあげたら、さぞかし初々しく艶(あで)やかな事でしょう。

薄汚れてしまってはいるが、その瀟洒な佇まいは自ずと「生まれの良さ」が滲み出て.....
如何にも上品にまとめられた平安調の螺鈿文箱、絵画的で流麗な葡萄の蔓のあしらい.....
もしかしたら公家の衣裳であったかも.....
（未だ光を失わない刺繍糸のグラデーション・・・どんな染料で染めたんだろう・・・）

今は襟も破れて痛々しい姿に・・・

そこで、多くの方々にご協力を仰いで模造制作にとり掛かりました。

この写真に見る如く、刺繍を施す前に描かれる下絵はその後の刺繍の仕上がりに大変な影響を与えます。担当した下絵師はその迷わぬ筆遣いで古典の持つ力を遺憾なく活写してくれました。

その迷いのない下絵は自ずと繍師の針を迷いなく導きます。

この作品は多くの方々からのご支援で令和六年春に完成させる事ができました。
そして、皆様のご意志を戴して本歌の収蔵される奈良県立美術館に寄託いたしました。

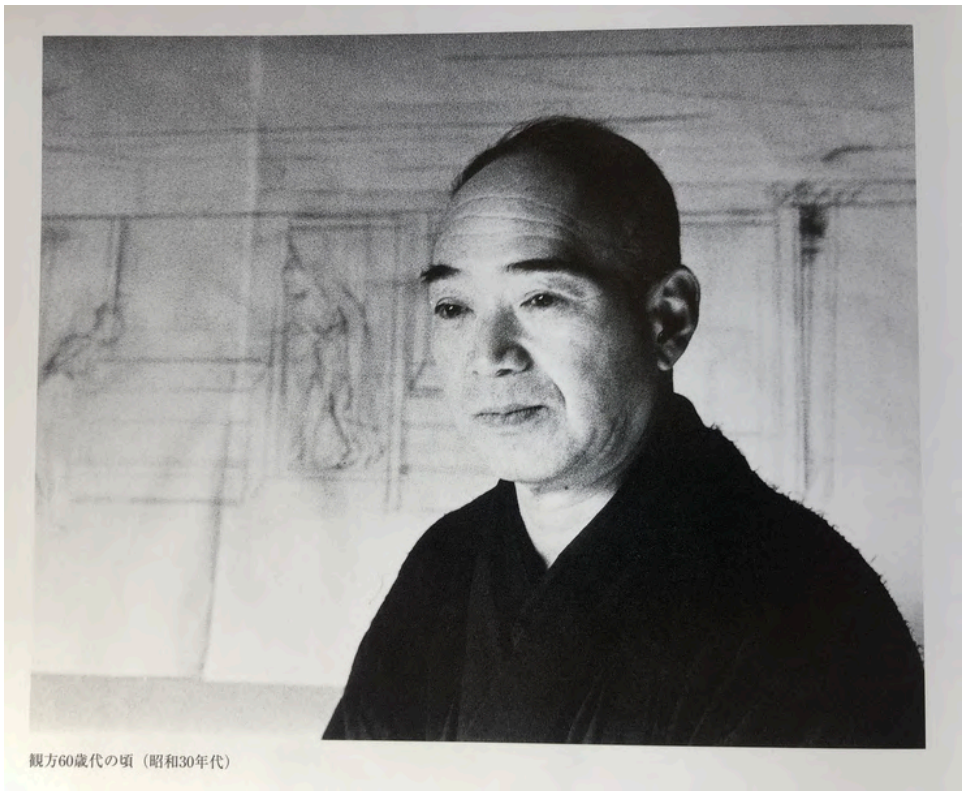
～薄紅の僅かに匂う姿に目を止めた人～『吉川観方（よしかわかんぽう）』～

このゆかしい作品を見つけ出して世に遺してくれた人物は“吉川観方“と云う京都画壇の重鎮で
上村松園、伊藤小坡、太刀川英次郎、河村長観、等と同時代の人です。

彼は巷間に打ち捨てられ、忘れ去られようとしていた風俗資料を丁寧に探し出し、膨大なコレクション（凡そ30,000点）として積極的に伝え遺してくれた『美の伝導者』でありました。

彼は集めた古衣裳をその時代時代の浮世絵を参考にしながら実際に祇園の芸妓達に着せて、
往時の風姿を扮装させて、それを写生する「故実研究会写生会」を（大正12年～）主催。
その会には上述の上村松園、伊藤小坡を初め多くの画家たちが研鑽を重ね合いました。
彼らの描く日本画の風俗の的確な描写はこういった研究活動からもたらされたのでしょう。

また、観方はその扮装姿を「ガラス乾板」に焼き付けて後世の研究資料としてくれました。
彼の一貫した「尚古・修史の姿勢」に頭が下がるばかりです。


観方60歳代の頃（昭和30年代）

<ありし日の吉川観方　2002年10月京都文化博物館「吉川観方と京都文化」展カタログから拝借>

『風化してゆく悲しさ』

多くの文化遺産の中で、特に「服飾」に関する遺品は、その用いられた自然素材そのものの物性ゆえに、耐久性に乏しく、時の経過と共に大半が劣化し風化を余儀なくされて、後世にその「ゆかしく美しい面立ち」やその「清々しいよすが」を伝え得ないのが実情です。

そもそも染織遺産というものは、誰かが意識を高くして、その「ゆかしく美しい面立ち」を後世に継いで行こうと覚悟し行動を起こさなければ、いつしか時の澱(よど)みに滲(しみ)み込んでしまう運命にあります。　私達は吉川観方画伯の後背を仰ぎつつ、その任の一端を担えればと思って励んできました。

因みに吉川観方の活動、その収集品については「京都文化博物館」の展示会カタログ『吉川観方と京都文化』に詳細に収録されています。

<上記カタログの表紙を飾る絵は「入相告ぐる頃」と題された吉川観方の卒業制作作品で、京都市立芸術大学学芸資料館に納められています。>

では、そもそも『帷子（かたびら）』とは？

古典を尋ねますと.....

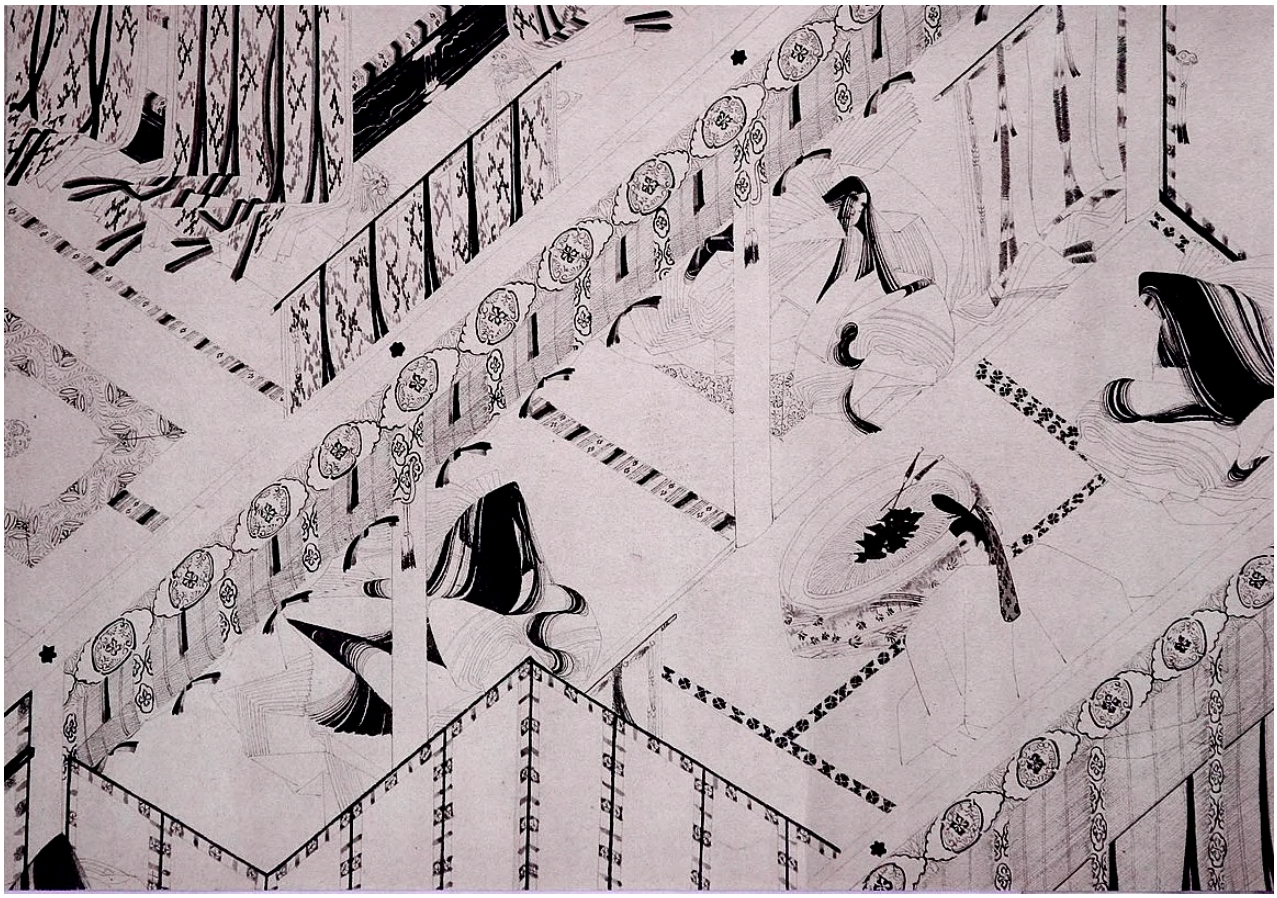
源氏物語「帚木（ははきぎ）」の段では「帷子」は几帳とか帳・帷（とばり）などを指して描かれています。

「…引き上ぐべきものの帷子などうち上げて、今宵ばかりやと、待ちけるさまなり。…」

枕草子「四二段」では「浅葱の帷子」「白き帷子」といった表現で夏装束として描いています。

「左右のおとどたちをおきたてまつりては、おはせぬ上達部（かんだちめ）なし。二藍（ふたあい）の直衣（のうし）、指貫（さしぬき）、あさぎの帷子をぞ透かしたまへる。すこし大人びたまへるは、青鈍（あおにび）の指貫、白き帷子も、涼しげなり」

「帷子」という言葉は、衣服の表地と裏地からなる袷（あわせ）を解いたときの片方、すなわち「片ひら」に由来しているとも・・・・



<「枕草子絵詞・部分」　wikipedia より>

私どもが今ここで向き合っている「　世界　」とは・・・・

パクス・トクガワーナ（徳川の静謐（せいひつ））と評された260年に及ぶ泰平の世が育てあげた夏の衣裳の世界です。それは約400年間続いた平安時代の国風文化が咲かせた女房装束、すなわち「襲衣（おそき）」に代表される衣裳文化と比肩されて、その歴史の延長線上に再び訪れた江戸の泰平（260年間）が生み育てた「華麗で優美な麻の世界」です。

<「浅葱麻地山水楼閣源氏香君が代和歌文字模様帷子」東京国立博物館蔵

by・文化遺産オンライン >

『そして、今にも消え入りそうな「切なくも儚い存在」』

しかしながら、明治中頃を最後に誂(あつらえ)られることも稀となり、悲しいことに現代では
その存在すら一部の識者を除いてキモノ好きな人々の間でさえも忘れ去られようとして
いる「切なくも儚(はかな)い存在」なのです。
その原因として考えられる事は、先ずは私達現代人の「キモノ離れ」が根本にありますが、
「帷子」自体、その製作費用が（江戸時代でも）大変高価であることにありそうです。

まして染め下生地となる「越後上布白生地」の生産自体が需要先（後ほど詳しくお話います）
であった武家社会の終焉と共に衰微していって、現代では誠に希少で得難い存在となってしま
ったことも挙げられます。

また染色する際も絹や木綿とは違ってこの麻生地（苧麻）は染色の難易度が大変高いことが
挙げられます。

それら諸々の理由故に現代では高級品すぎて扱いづらくなってしまったと云う事でしょう。

涼しげに透け通る素材「越後上布」の軽やかな風合いがこの写真から観てとれます。

～『印象的なその存在感』～

私たちは今まで幾多の「帷子」を拝見し研究して参りました。その間いつも感嘆させられ
敬服させられてきたそれら「帷子」に共通した印象をお伝え致しますと、

1、手間暇惜しまず草（青苧(あおそ)）を裂き、糸に仕上げ、雪中に座して織りあげる尊さ。
2、羽衣のようなその薄さ、その軽やかさ。（約320～370g内外）

3、「氷をまとったようだ」と形容される気化作用の優れた苧麻の涼やかさ、冷たさ。
4、「光を含む」と称されるように静涼に透け立って内部から輝きを放つ生地の玲瓏さ。
５、夏を涼やかに清々しく過ごさせる為の機知に富んで文学的なデザイン。
6、天然染料を用いて美しく染め上げた染色の至芸・染色史上の快挙。
7、「徳川の静謐」が育て上げた「夏衣裳の精華」

とお伝え申し上げられます。

では、なぜ「帷子」を制作する事になったのか

中野自身は若い時分、特に「古典芸能」などで用いられるご衣裳等のデザインやその誂え制作に関わっていました。が、それも、昭和の終わり（1989）までで、45歳の時、かねてよりの陶芸を志し茨城県に移って三〇余年を過ごして参りました。（www.oguna.com）

Oguna 2017

2017年秋、古希を迎えての記念展にを開くに当たって京成百貨店の会長から「今まで歩んで来た君の全てをお見せしたらどうか」と云う奇抜な提案を頂いて、陶芸作品は勿論のこと、ブロンズ作品や、かつて染め上げた各季節の「訪問着」やその図案、特に凝って織らせた羅織の帯、それに特別に織ってもらった越後上布の着尺等々を展示したのでした。その中に幾枚かの「帷子」の下絵図があったのです。

その会をご覧になられたご婦人から

『今でも「帷子」は作れるのかしら.....もし作れるなら是非私に作って欲しい.....』

と図らずもの依頼が寄せられたのです。

この依頼は現場を去って久しい私にとっては晴天の霹靂であり、また、深くも懐かしい世界の記憶を呼び覚ます痛烈な起爆剤ともなりました。

早速京都の知古に連絡をとった所

「　それこそ昭和の御代に中野さんから注文を頂いたのを最後にもう３０年以上も文化財越後を使った帷子の染めはやってはいないし、当時の職人さんも皆歳をとったり、亡くなったりで.....現実に今、文化財越後を扱える職人がいるかどうか....それに先ず第一に全工程のスタッフを集められるかどうかも不安だ・・・・・　」

との返事でした。

＜「風わたる武蔵野」の下絵図の初稿（昭和58年）＞

それでも諦めずに、手元に大切に保管して置いた「重要無形文化財越後上布」の白生地と描き擱(お)いていた下絵図を携えて、京都に向かい、職方を何軒も尋ね歩き、縷々(るる)話し合い、検討を重ね合った結果、漸(ようや)く染め上げる目処が立ちました。

爾来足掛け２年の歳月をかけて下の写真でご覧頂けるように「風わたる武蔵野」を描き終える事ができました。

白地を絞り分けて、そこに武蔵野の風景を手描き友禅で施し、丁寧に刺繍で加飾した作品です。
2019年完成、2022年に至ってご依頼主の了解のもと「平成の御代に作られた唯一の帷子」として、奈良県立美術館に寄託致しました。
その際　改めて学術風に「白麻地染分風景秋草文様染繍帷子」と寄託資料に記載して・・・・

（越後上布を生成り色に染めてから手描き友禅を施し、
その上にこまめに刺繍を置いて・・・）

示された　“ 道 ”

我が民族が太古（多分、旧石器時代）より伝え継いできた苧麻（ちょま）を素材とする麻の衣裳文化。その極まった先に凛として美しく咲き誇った夏の衣裳「帷子」・・・・

図らずも稀有な機会を得て、暗中模索しながら、今一度その制作に携わる事ができたと云うことに７０歳を超えていた私は大いに興奮致しました。　　**～そしてこの興奮が輪を広げていったのです～**

翌２０１８年の春、日頃から作陶活動を応援して下さっている方々との語らいの中から・・・

「我々もそろそろお迎えが来ても可笑しくない歳になってきた。そこでだ、「何か美しい置き土産」を世話になった世間に遺すって云う事はきっと愉快な事じゃないだろうか？！　「消え入りそうな染織文化」を甦（よみがえ）らせたいと云う君の考えは面白いと思う。　此処は水戸、温故知新・修史の地・・・徳川光圀の『継往開来の志』を「帷子」を復刻することで改めて現代社会に問い掛けるのも一興じゃないか」　　＊ 継往開来（先人の事業を継ぎ、発展させながら未来を切り開くこと）

と云う遠大な構想とそのための協力の意思が齎（もたら）されたのです。

「”道”は開けた」という想いに私は昂揚しました。
緊禪(きんこん)一番、もはや前へ進むに迷いはありませんでした。

「継往開来」
～『模造プロジェクトの始動』～

＜奈良県立美術館収蔵庫での熟覧風景＞

間髪入れず、手持ちの資料と文化財越後上布を鞄に納めて「奈良県立美術館」を訪ねた私は躊躇(ちゅうちょ)することなく、当館所蔵「吉川観方コレクション」の帷子の模造の許可を願い出ました。

やがてこの願いは聴き入れられ、職方随伴の熟覧研究がはじめりました。そして、私の描く摸造構想に対する職方の皆さんの理解も深まり、ここにプロジェクトが正式に立ち上がったのです。

～目指すは以下の四点！～

1、「黒麻地几帳桐文様染繍帷子」　17世紀、未だ友禅染の完成を見ない時期の逸品
2、「白麻地光琳松染繍帷子」　18世紀、光琳松を飄々と描いた洒脱さが好ましい摺染の逸品
3、「玉子麻地銀杏冊子染繍帷子」18世紀　糊糸め、多色使いで描きあげた友禅染の逸品
4、「薄紅麻地葡萄文箱繍帷子　17世紀、瀟洒で秀逸な刺繍で描いた寛文期の逸品

「染めと繍いの専門家たち」と連れ立って何度も美術館に赴き当該帷子の熟覧を重ねました。また、越後の里へは「極薄の文化財越後上布」の制作依頼を順次重ねていきました。

復刻第一弾

～「黒麻地几帳桐文様染繍帷子」の模造次第～

奈良県立美術館所蔵　吉川觀方コレクションの白眉「黒麻地几帳桐文様染繍帷子」

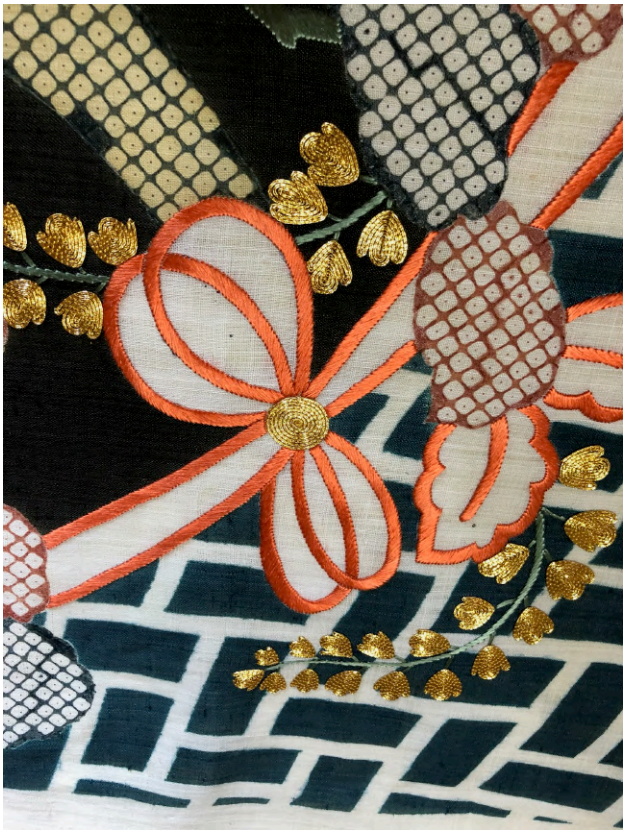
貞享～元禄期の闊達な精神を表象する「黒麻地几帳桐文様染繍帷子」。３００年余を経てもなお人々の心を打つデザインの斬新さ、濃密さ、力強さに心惹かれます。ただ、惜しむらくは、　既に生地の劣化が著しく、至る所に破損が生じていて、痛々しい限りなのです。

＜よく調べるとこんなにも劣化している＞

この作品が作られた当時はまだ、本格的な友禅染は生まれておりませんでした。絞り染めと型染と刺繍が主流の時代でした。この作品もその系統でして、黒地に桐の葉を白く抜いて、その白く抜けた部分に型を用いた摺り疋田を入れて、それを緻密な刺繍で加飾した逸品です。

さて、この作品の模造は中々四苦八苦でした。特に苧麻生地の扱いについて後の世に伝え遺すべき多くの事故を経験し、模造の道の安からざるを教えてくれました。
結果２０１８年から２０２２年の足掛け５年を費やすこととなりました。

そして、その製作を資金的に最後まで支えて下さった方のご意志のもと、制作資料と共に
奈良県立美術館に寄託致しました。



精巧な摺り疋田と緻密な刺繍が要求される作品でした。

～『重要無形文化財越後上布』のお話～

映像的には"You Tube"　http://www.youtubu.com/@narablog　もしくは「越後上布」と検索してご覧頂くとご理解が進むと存じますし、また、「帷子」については　“Wikipedia”などでお調べいただけると有難いです。

そもそも「重要無形文化財越後上布」は、太古から衣服に用いられて来た苧麻布（ちょまふ）の現代にまで継承維持されてきた麻織物の貴重な優品です。

越後上布の糸の原料　2022年度産「苧麻（青苧）」の束

～その出自のゆかしさを～

東大寺正倉院の御物にも「越後国久疋郡夷守郷戸主肥砦人麿呂　庸布一段」と墨書された屏風を納める『麻布』の残欠が大切に保管されていることからもそのゆかしさが偲ばれます。

そう、今でも越後の頚城郡・塩沢や小千谷を中心とした雪深い里で「苦を苦とせぬ穏やかな人々」によって織り続けられています。

“いざりばた“ を織って見せてくださった技術保存協会の高波さん

「帷子模造」のために織ってもらった「重要無形文化財越後上布」の白生地

降って、源頼朝は征夷大将軍拝命に際し千反もの越後布を朝廷に献上した記録が「吾妻鏡」に遺されていますし、室町幕府においては武家の正装として「素袍（すおう）、袴は越後布の事」（群書類従巻四百十一武家部）と規定されましたし、江戸幕府に於いてもこの定めは踏襲されて、盛時には年間20万反も生産されていました。しかしながら今では「時代の要請から外れて、もはや希少で尊い存在」となってしまった布でもあります。

（但し江戸中期には奈良に於いて越後・出羽、会津から苧麻を仕入れて「奈良晒し」と称した苧麻布を年間四十万反も生産していたという記録もあり、民需においても苧麻布は人々の必需品であったのです）

（国立国会図書館蔵　「装束着用之図」より素襖の図）
国立国会図書館デジタルコレクション　装束着用之図 [2]

戦国時代の典型的な素袍・袴の着用姿
浅井久政像　　wikipediaから

江戸城中での正装「大紋」の着用姿
鷹見泉石像　　wikipediaから

国史名画刊行会編『　赤穂義士 誠忠畫鑑　』

この絵はあまりにも高名な場面を描いています。殿中での正装である素袍と長袴の着用の様子がよく判る絵です。人物の瞬動に応じて翻る麻衣の様子をよく捉えて妙です。
しなやかな絹ではこうはなりません。麻の単衣ならばこその風姿です。
この張りのあるサラリとした潔(いさぎよ)さを代々の武家は尊んだのでしょう。

描かれてる装束それぞれが、なんとも品格のある色使いで、なかなかのお洒落で個性的です。
この計算し尽くされた意匠（デザイン）は何を伝えたくて、何から発想したのでしょう。
浅井久政像にみられる複雑微細な文様。現代のプリント技術ならさもありなんと云う所ですが、こんな微細複雑な文様を染め出した当時の染色技法は、そして、染めさせた側の心意気は・・・

鎌倉、室町、戦国とこの列島中が群雄割拠に沸いて、人文共に昂揚していった時代・・・
身を飾る衣冠束帯、その鮮烈な意匠が意味する宇宙観が周囲の視線を惹きこんで「威儀の場」を一層壮麗に構築していったことでしょう。

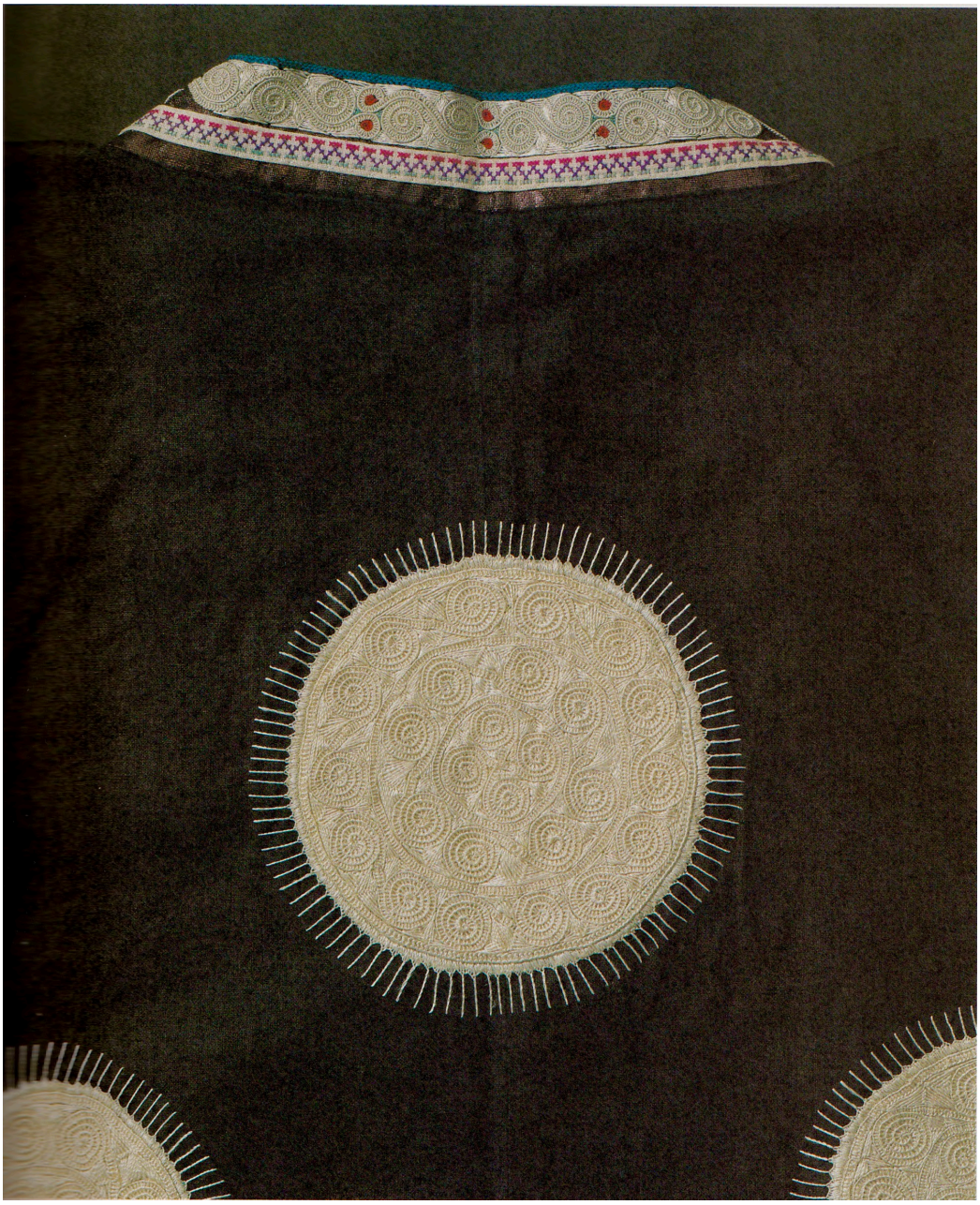
そんな武家の矜持を麻に託して描き上げた凝りに凝った意匠(デザイン)が・・・やがて太平の世を迎えて、庶民の間にも大きく花を咲かせてゆくこととなったのです。
その典型が夏の衣「帷子」なのだと研究を重ねております。

少し目を転じましょう・・・・

左上は広西チワン族自治区トン族の女性の衣装。右上は貴州省従江県信地トン族男性の祭礼衣装
左下は雲南省大理州魏山県ペー族の女性の衣装、　　右下は湘南省通道県トン族の女性の夏衣装

この五枚の写真は2007年に田辺昌子氏（千葉市美術館）・原田敦子氏（宮城県美術館）・曽根宏美氏らによって企画された「瀧澤久仁子コレクション」を紹介する美術展「太陽と精霊の布」展のカタログから拝借しました。

どの民族の意匠にも共通して言える事ですが・・・
意匠(デザイン)を組み立てる創意を励ますのは、その意匠の向き合う“現場"にありましょう。
即ち、誕生を祝う場であり、婚礼を寿ぐ場であり、慟哭の場であり、威儀を正す場であり、
はたまた神のミアレを恋う 悄 悅(しょうきょう) の場でもありましょう・・・。



湘南省通道県トン族の女性の夏衣装の背中

藍を黒光りする程に濃く染め上げて、そこに緻密な刺繍を施してゆく祈りにも似た指先の集中は、民族の祖霊達へ、家族の守護霊に、そして山の峰々、道の辻々に潜む森羅万象を司る精霊たちを祀る祭壇をも想起させて、観る目に清々しく尊く在ります。

モノローグ

　心をこめたお手紙をありがとう。
彷徨(さまよい)い歩く心を除けば、いたって元気にしています。
そう、あれからの私は「神の遺し擱(お)いた気象(けはひ)」のことをずーっと考えていました。

その神とは奇(く)すしく畏(かしこ)き欲望です。
地に涌(わ)き、闇に充ちて、絶え間なく飛翔する鮮烈な魂の震動です。
道理を離れて思うところの熄(や)むにやまれぬ 道 です。
明暗ふたつながら合わせもち、ひそかに依(よ)り来きては夢に顕(た)つ　ひたぶる念(おも)ひ　です。
そう、非合理の神性です。

匿(かく)されたもの、言挙(ことあげ)せぬもの、決して試してはならぬものです。
それ故にこそ気懸かりで、眩しく私の心を捉えるのです。

現身(うつしみ)を投じて遥か遠くを窺い、頬ふく風にさえ愛しい行き交(か)いを感じつつ、
琴の音の忍ぶ神の斎庭(ゆにわ)にひれ伏す巫女さながらに、焚きくゆる香の揺らめきにさえ慄(おのの)きながら、
「記(しる)された言葉」「匿(かく)された影」「あえかな気象(けはひ)」をひそやかに語りはじめようと想い定めています・・・・・

慕わしいあなたへ

さて、本論に戻ります。

模造第二弾

～『白麻地光琳松染繍帷子』の模造次第～

さて、次の写真は奈良県立美術館所蔵、吉川観方コレクション中の佳品「白麻地光琳松染繍帷子」の模造が完成した時のものです。

本歌は尾形光琳考案と伝えられる「光琳松」を瀟洒に配した、それこそ桃山時代の長谷川等伯の「松林図」を洒脱に読み換えた、元禄と思しき軽やかな逸品です、が・・・・・

長谷川等伯　「松林図」右雙　　Wikipedia より

下の写真でご覧いただきます様に本来の白地は薄汚れ黒ずみ、片袖は既になく他の布が当てられ、両の衽（おくみ）も失われ、刺繍糸も抜け落ちて哀れな状態でした。

されど、薄汚れていてもその出自のゆかしさを物語るその風情故に打ち捨て難く、
復刻の対象に選び取って、細心の注意を払って作業に努めました。
特に使用されている上布のしなやかで極々薄い事には目を見張るものがありました。
それ故、中野自身が手元に大切に保管しておいた昭和40年代初頭に織られた極薄の
「文化財越後上布」をその制作に充てる事としました。

また、袖口と襟裏に付けた紅色の“ふき“の再現にもこだわり、正倉院の研究で高名な人間国宝・吉岡幸雄さんに「紅花」で染めて頂いて往時を偲びました。

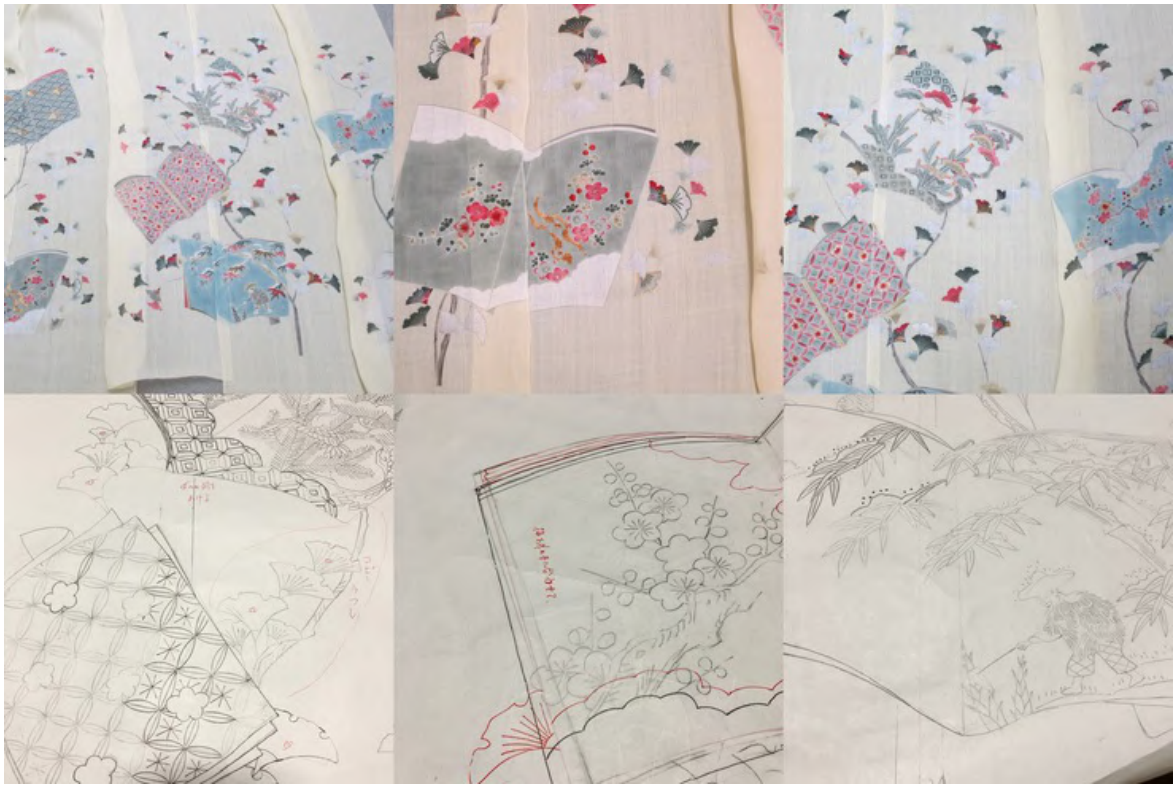
完成したこの作品もこのプロジェクを支援してくださった方のご意向に沿って、その制作資料とともに奈良県立美術館に寄託致しました。

復刻第三弾

～『玉子麻地銀杏冊子染繍帷子』の復刻次第～

＜奈良県立美術館収蔵庫にて＞

次の写真も同じく「玉子麻地銀杏冊子染繍帷子」を模造した作品の部分とその下絵図です。



＜染め上がりを確認するための絵合わせ、と、試行錯誤の後先を示す下図＞

練達な糸目糊に多色使いで繊細な友禅染めを施し、彼の唐土の「二十四孝物語」の
「母のために雪の降る竹林で筍をとる孟宗」の故事を主題に据えて、暑い夏の日に冬
を偲ばせる趣向をも秘めた一領で、18世紀の友禅染めの優品として私たちにとって
学ぶことの多い佳品でした
本歌の「玉子麻地」と記録されたその卵色の地もやや燻んでしまってはいますが、
しかし、実に闊達で繊細な糊糸目はしっかりと地裏まで通って染料の滲みを防いで・・・
確かな技を今に伝える初期友禅染の逸品です。

<仕立て上がってきた帷子>

この作品も支援者ご意志を戴して、制作資料とともに奈良県立美術館に寄託致しました。

因みに吉川観方の友人「伊東深水」も彼の作品「髪」にこの帷子を写し描いています。

伊東深水の作「髪」部分

「美しいキモノ」婦人画報社の取材を受けました。

2023年春、足掛け５年に及んだ「帷子復刻プロジェクト」に関して「美しいキモノ」
婦人画報社の取材を受けました。有難い事です。「観ていてくれる人は必ず居られる・・・」
ことにつくづくと感謝した次第です。

婦人画報社「美しいキモノ」2023年春号

～『経験を重ねることが出来た昭和という時代』～

私がかつて昭和（４７～60年代）という時代に帷子など古典衣裳に携われたという事は
ある意味幸せでした。当時でもすでに実用からは遠ざかっていた「帷子」ではありましたが、
それを好んでお能や仕舞い、各流派の舞踊等にお使いになられる方々が結構おいででしたから。
国立小劇場あたりで日頃のお稽古の成果をご披露なさる「おさらい会」が盛んに開かれていて、
その日の為に新たに誂えられたご衣裳をお召になって「唄われたり舞われたり」と古典芸能に
親しまられる方々が大勢おいででした。

[仕舞い　熊野]　1962　　伊東深水

そんな「おさらい会」や「演奏会」の需要を引き受けた染織の現場にもまだまだ戦前派が現役で活躍されて居られましたから、古典的染織の実践にも不安はありませんでした。

因みに、これより少し前（昭和30年代後半・・・私の記憶が正しければの話になりますが）「気骨の人」石坂泰三氏率いる日本経団連が、確か東京12チャンネルだったと記憶しますが、「古典芸能の時間」を提供していた時期がある位、昭和と云う時代は古典芸能とその周辺にあっても最も殷賑を極めたにぎにぎしい時代でした。

Wikipediaより　　上村松園　　「序の舞」

『困難な時代の始り』

昭和天皇の崩御に国内が弔意の日々を過ごす中、歌舞音曲は控えられ、継いで訪れたバブル崩壊とその後のリーマン・ショック等々３０年に及ぶ景気低迷を経た現在、世代が替わり、社会のグローバル化も進み、人々の価値観も多様化して、どの分野に於いても言えることでしょうが、「**古き良き伝統を後世へ伝えることがとても困難な時代**」に入って仕舞ったことは確かなようです。これは模造作業に携った者皆が自身の担う現場で痛切に感じさせられている現実でもあります。

～『伊勢神宮の式年造替』『光圀の修史事業』そして、『吉川観方』に・・・

伊勢神宮「式年遷宮」　by. isejingu.or.jp

～「美術品や工芸品は美術館や博物館に収蔵すればそれで文化は維持され継承されるというものではない」ことは周知のことです～

そこで思い起こされるのが二十年ごとに繰り返される伊勢神宮の式年遷宮・式年造替の実相です。「二十年という時間間隔を設定した古人の「尚古の知恵」。 この「二十年」と言う時間感覚が如何に文化の継承のためには適切か云うことを私どもは自らの人生の時間に照らし合わせて納得いたします。この式年遷宮・式年造替こそが我が民族の持ち伝えてきた床しい文化を確実に後世へと継承してゆく「神の示された道」なのだと拝します。

また、徳川光圀が江戸駒込の藩邸内に興した史局・彰考館において推進した修史の事業、即ち“本朝の史記“、即ち“大日本史”の編纂（この事業は明治39年まで続いた）及び光圀自身が経験した明暦の大火の教訓から、国内各地に偏在する古典書籍を探し出し、これは重要と思われるものは二部づつ臨書複製させて、それらを東西二ヶ所の蔵に納めて不慮の事故による湮滅からそれら古典籍を守る可く配慮したという「継往開来（けいおうかいらい）の志」に大いに感銘するところです。

そして、『吉川観方』の存在と彼の遺してくれた膨大な民族文化遺品の存在です。個人が「高邁な見識と意志で後世に伝えようと努力されたコレクション」を私達は現在ここに労せずして観ることができる有り難さ・・・・彼の尊い意志に唯々敬服致します。
因みに、彼の「コレクション」の大半は彼の意思で奈良県立美術館に収蔵されています。

Oguna 2017

私達「古典染織復興会議」もこの活動の経験をそれぞれの後継者達に上手に引き継いで、将来に亘って染織文化の継承が安定的に継続してゆくことに細心の留意を置きながら、一方で「光を宿す」越後上布（苧麻布）の「素材としての現代的価値とその位置づけ」を未来に探りつつ、世界の“KATABIRA “を模索していきます。

最後になりましたが、ゆかしく貴重な上布を探したい、また、自身の“オリジナル”を染めてみたいとお思いになられたら是非ご一報下さい。図案の考案からお手伝い致します。

一人でも多くの方が「修史・尚古・継往開来」の意義をご理解くださることで、先祖から伝えられた「ゆかしい文化」を将来の世代に継なぐことができると私どもは信じて止みません。
どうぞ、今後も「古典染織復興会議」へのご理解と暖かなご支援・ご協力をお願い致します。

ここまで、私共の想いをお読み頂きまして本当にありがとうございました。
最後になりましたが、改めて皆様のご多幸を心からお祈り申し上げます。　　頓首

古典染織復興会議
代表　　中野童男

古典染織復興会議　綴

●「古典染織復興会議」という団体について

2017年から始動した奈良県立美術館所蔵「吉川観方コレクション」の江戸期の染織文化遺産『帷子（かたびら）の模造プロジェクト』に携わった専門家によって結成された団体で、その模造作業の過程で各員が自身の心中に再確認した『伝統文化への畏敬』とその『継承への意欲』から生まれた研究・実践団体です。

●会員

我が国が世界に誇る夏の衣裳『帷子』の染め下生地である「重要無形文化財越後上布」の生産に携わる「技術保存協会」の方々と、その生地に古典に学んだ染色技法を活かしつつ加飾を施す京都の染繍家の方々と、その双方と連携して具体的に模造プロジェクトを企画推進する私共の三者、設立時発起人8名、一般会員46名の任意団体です。

●この会の主たる「目的」

江戸の「泰平の世」に百花繚乱と咲き綻んだ夏の衣裳「帷子（かたびら）」に焦点を絞って調査研究し、その華麗な風姿の実相を探るべく摸造制作に取り組むと共に、その根幹的素材である「越後上布」（重要無形文化財）の生産振興にも裨益することを願いつつ、また、その模造成果をもって後世への染織伝統の継承に資する事を目的としています。即ち「継往開来の志」の実践です。

発起人一同　　越後　　西脇格太郎・中島清志・桑原　博・原　久史
京都　　村山　裕俊・宮崎克義
水戸　　中野童男・中野千賀子
一般会員　46名

事務局　　住所：〒311-4313 茨城県東茨城郡城里町上入野3950
中野童男
（携帯）090－2257－3432
✉ oguna@hotmail.co.jp

みずほ銀行　水戸支店
店番316　普通口座　3057076
口座名　　古典染織復興会議